



石見の海 角の浦廻を
 浦なしと 人こそ見らめ
 瀉なしと 人こそ見らめ よしえやし

浦はなくとも よしえやし
 瀉はなくとも いさな取り
 海辺をさして 和多津の 荒磯のうへに

か青なる 玉藻沖つ藻
 朝羽振る 風こそ寄らめ
 夕羽振る 波こそ来寄れ
 波のむた かよりかくより

玉藻なす 依り宿し妹を
 露霜の 置きてし来れば
 この道の 八十隈ごとに
 萬たび かへりみすれど
 いや遠に 里は放りぬ
 いや高に 山も越え来ぬ
 夏草の思いしなえて しのふらむ
 妹が門見む なびけこの山

石見のや高角山の木の間より
 わが振る袖を妹見つらむか
 小竹の葉はみ山もさやにさやげども
 われは妹思ふ別れ来ぬれば

いはみのみ
 つののうらみ
 いはみ
 うらみ

にぎたつ
 ありそ
 あさはふる
 ゆうはふる

よりねし
 つゆじもの
 やそくま
 よろずたび
 いやとおに
 さかりぬ
 いやたかに
 いもがかど

たかつのやま
 ささ
 いももふ